

おしえて
小森先生

小児の 耳鼻咽喉科 疾患について

高知大学医学部付属病院
耳鼻咽喉科
小森 正博 先生



高知県にてエコチル調査にご協力頂いている方が

1歳6か月〜2歳時に最もよくかかった感染症疾患は中耳炎(29%)という結果がでています。これは現在の生活環境や年齢的な体の特徴を反映した結果といえます。

昔、2歳までの幼児を保育園は預かりませんでした。それは2歳までは免疫力が低く感染に対して弱いからです。現在、2歳未満の幼児も預かる時代になり、**鼻やのどに炎症をきたす病気になる機会が増えています**。そして、その菌には抗生物質に対して耐性が進んだものが多くなっています。また、幼児では耳と鼻との通り道である耳管の径が広く・短いことから炎症が鼻から耳へ波及しやすいことが知られています。大人の場合、強く鼻をかみすぎた時に耳がツーンとするのはこの耳管があるためです。さらに、幼児は鼻かみが上手にできませんから鼻水が奥に貯まりやすく、炎症が停滞しがちです。

このように、集団保育にて

風邪を引きやすくなったところに、幼児の構造上の問題と鼻かみが上手にできないことから中耳炎になりやすいと考えられます。

次に、**風邪やインフルエンザにかかっているのにくしゃみ、鼻水、鼻づまりの症状があったところ**に回答された方が2〜4歳の各年齢において30%強おられました。1歳6か月〜2歳時でも2%の方が医療機関にて**アレルギー性鼻炎と診断**されました。

近年、アレルギー性鼻炎患者の低年齢化が進み、2歳からスギ花粉症になる方もおられます。高知県は全国一杉が多い県です。今年は1月中旬、2月初め、2月中旬の暖かい日に一時的に花粉が飛び、2月末から本格的な飛散になりました。暖かい高知は10、11月に秋スギ花粉症の症状がある方もおられます。最近、アレルギー性鼻炎は気管支喘息との合併が高く、**アレルギー性鼻炎を治療することが気管支喘息の発症予防につながる**

がるといわれています。また、アレルギー性鼻炎などの鼻の炎症を治療することは**中耳炎の発症を抑えることにもつながります**。

保護者の方がお子さんの変化に気づくのは、鼻水が出てきたときが多いと思われます。大人は鼻がつまると薬を飲むと考えますが、子供は鼻がつまっても自ら訴えませんが寝ているときに普段より呼吸音やいびきが大きく、時には無呼吸が生じて息苦しそうにしていることが鼻づまりのサインになります。この10年、睡眠中に呼吸が止まる病氣(睡眠時無呼吸症候群)が成長ホルモンの関連の中で体の成長に影響することもわかりました。幼児の生活の半分を担っている睡眠にも目を向ける必要があると考えられています。

